

# がん患者の QOL における、レスポンスシフトを考慮した反応性と意味のある最小スコア差の評価研究

帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座  
帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座  
帝京大学大学院 公衆衛生学研究科

松田 彩子  
大久保孝義  
山岡 和枝

## 1. はじめに

がん患者の主観的な評価指標である QOL (Quality of life) を、いかに患者にフィードバックしていくかは、現在の医療において課題とされている。フィードバックの方法を考えるうえで、QOL の変化を適切に評価し状態を把握することは重要である。

QOL 評価における代表的な要素として、反応性 (Responsiveness)、臨床的に意味のある最小スコア差 (Minimally Important Difference: MID)、レスポンスシフト (Response shift : RS) がある。レスポンスシフトの概念を考慮し、反応性や MID を評価することは意義があると考えられる。しかし、レスポンスシフトの評価方法およびレスポンスシフトを含めた反応性、MID の評価に関しては、確立した手法はまだ提示されていない。本研究では、乳がん患者の反応性と MID を、レスポンスシフトの影響を調整した上で評価することを目的とした。

## 2. 方法

本研究は、ワークブックによる介入を実施し、その効果を QOL の観点から検討する並行群間無作為化比較試験の一環として実施した。調査対象は外来化学療法を受ける乳がん患者 137 名とした。QOL 評価には EORTC QLQ-C30 を用いた。評価は、介入前 (T1) と 3 か月後 (T2) に実施した。RS の評価では、従来の Then Test、共分散構造分析に加え、近年、新しい方法として提案されている Random Forest の手法を用いて検討した。また、T2 の時点で、患者に QOL は改善したかどうかをたずね (-7~+7)、改善群 (+2~+7)、変化なし群 (-1~+1)、悪化群 (-7~-2) の 3 群に分けた。

## 3. 結果

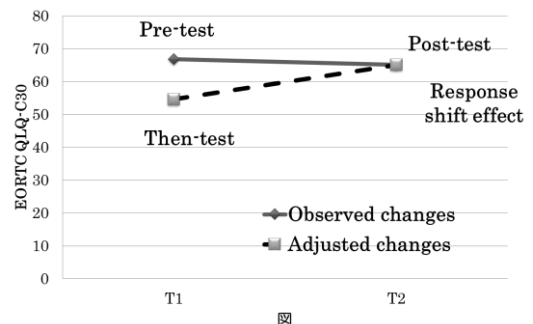
Then Test<sup>(1)(2)</sup> では、患者に T2 の時点で T1 の状態をたずね、後ろ向きに評価した結果を使用した (図)。また、Kvam AK らの方法<sup>(1)</sup> に従い解析を実施し評価した。

本研究で示された RS は、特に、改善群において、T1 の時点が悪く評価し (RS : 12.2, P 値 : 0.01)、悪化群ではよく評価していた (RS : -8.9, P 値 : 0.34)。また、改善群の MID において、RS を考慮した MID (Adjusted changes) は、観察された MID (Observed changes) より 12.2 点と高かった。

共分散構造分析、Random Forest の手法を用いた検討に関しては当日報告する。

## 4. 考察

本研究において、外来化学療法を受ける乳がん患者の MID が明らかになり、また、MID を評価する際、RS を考慮することの重要性が示された。今後、RS の評価方法の検討を実施することは、QOL 研究の推進につながると考える。



## 参考文献

- (1) Kvam AK, et al. Minimal important differences and response shift in health-related quality of life; a longitudinal study in patients with multiple myeloma Health and Quality of Life Outcomes 2010, 8:79
- (2) Jansen SJT, et al. Response shift in quality of life measurement in early-stage breast cancer patients undergoing radiotherapy. Quality of Life Research 2000, 9